

豊日の古戦跡を訪ねて

田北 鴨 舟

はじめに

大分県地方史研究会、白菊会、あるこう会合同主催で島津氏、大友氏の戦ひの跡を訪ねる会を昭和四十二年十一月廿六日に行ふという通知を地方史研究会の名で立川輝信先生から受けとつた。

大分を午前八時出発という私の方からは時間的に無理なので、三十分延ばされないかと電話したが、八時というのがむしろ遅いのであるが大分近在からの都合を考へてギリギリの時間だから是より延ばす譯に行かないという。私の地は直入郡の北部で芹川ダムの畔を過ぎ小野屋大分と出るので、六時前家を出て一番のバスで大分着が八時二十分か三十分になるので間に合はぬ。前日大分に出ていなければ仕方がない。

是非行つて見たい。否行かねばならぬ理由がある。

私の田北家は大友氏三代目からの分家で、田北郷が田北姓の発祥地である。代々大友本家の重臣として来たものである。

天正の役島津大友の戦には、一族多く奮戦して軍功を立て又多くの戦死者を出している。現在直入町下田北眞法院の墓に天正六年十一月

二十三日、日洲高城戦死の碑が幾つかある。是非共戦跡を訪ねて墓参したいと久しい宿望である。

天正八年三月松牟礼城主田北大和守紹鉄討死の日田郡大山村松原の田北塔には、数度一族を連れて墓参している。

こんな因縁があるので、此の機逸すべからずと田北関係者数人に連絡して前日大分に出る。結局縁故者三三人が参加した。

往 途

十一月二十六日午前七時半大分バス本社乗場に揃う。段々と知つた顔が見える。

立川先生は平素の世話やきぶり宜しく、人名簿をかゝえて色々世話し、出席を確かめている。旧大分中学の同期生友永成男君が来た。

十日程前八年ぶりに大中三十期生の会合をして、十五六人集まつたので、君もかといふ訳で同席乗車する。

乗車後わかつたのであるが、大分市畑中泰敏子さん（元上田北）と主人建喜さんも居て、古事を話す。人員六十人計り。朝寒ではあるが晴れやかな日である。

定刻の八時になつて出発。元町を過ぎる頃から渡辺、金子、立川の三先生、次いで戸次の木本さん、佐伯の古藤田さん方が説明をして下

さる。

一日中三先生が説明して下さったので、車中外を眺めながら大要をメモしたので、是れを追つて次に記することにする。

先づ先きに今日のコースを略記しておく。大分元町、敷戸、戸次、竹中、吉野、臼杵、津久見、佐伯、直川、宗太郎、市棚、延岡、日向耳川、川南、高鍋まで。

帰りは此の線を再び辿る。

早くも元町上野の古代から始まり、敷戸は文政時代百姓一揆の時勢揃いした所、大大川の祇園河原では大友の勇将吉弘宗幸が薩軍と戦つた處である。

戸次は宗麟時代キリスト教会があつて、宗麟がまわつていた。木本さんが戸次から乗り込むなり、立川さんからせかれて説明が始まる。

中津留川では島津大友の戦つた所で、四国の長曾加部信親がこの付近で戦死した。利光は鶴が城主利光宗魚が島津と奮戦し戦死したところである。

戸次にソーダの地名あり古くは寒田神社のあつた所。

車は進んで野津町に入る。

野津は大友時代野津氏の居た處である。車窓の右手の山には妙珍の

墓あり、カマボコ形の碑があるという。

左手には武山さん経営のドライブインあり、近くにクリンタンの遺蹟あり。大友二階くづれの時の義鑑（宗麟の父）の墓あり。野津市は豊後の奇人吉四六さんの生地で墓あり、吉四六さんと共に話の主人公野津市普賢寺和尚さんは有名だが、宗麟時代クリンタン宣教師のザビエルと普賢寺の和尚さんは宗門の論争したことは有名である。

川登を過ぐる頃、

川登の風連鐘乳洞の上は古戦場で豊後勢の者が島津方に寝返りを打つた者が可なりあつた。川登の広田という男鉄砲の調練をしていた。南海部郡彌生町に入る。

有料道路で中の谷トンネルは長さ八九七メートル、七億四千万円をかけて昭和三十六年二月から起工し四十一年に出来上つた。九州二位の長いトンネルである。

野津町と彌生町との境で旧道は道の左上にある。此の辺は山深く古來往來する人々は狼の聲に脅かされ、又雲助に随分困らされ泣かされたといふことである。

此の辺一帯は鐘乳石石灰岩のある所なので、道端や石垣も石灰岩である。知らぬ人には何と贅沢な石垣であるとかさへ考へるかも知れぬ。

不津主の神武ミカ槌の神を祀る尺間岳は左手にあり、六〇八米の山

である。登山口がある。次に愛宕山あり。樺牟礼城の左手で昔の上野村である。

次いで直川に入る。直川は西南戦争終了の地である。薩軍は優勢であれば、これより四国に渡り東上しようとしたのであるが、破れて終了の地となつたのである。即ち薩軍が此の地まで進んで来ていて西郷隆盛もつい近くまで来たという。

中津隊の増田宗太郎、阿部順平等もここまで来ていたといふ。

宇目のドライブインでトイレ休憩で一同下車し背伸びするし、牛乳やジュースに水分の補給する。石人形が面白いので二つ買ふ。

是れから有名な宗太郎の嶮である。

ここに昔宗太郎という樵人が居て往來に難儀して居た人々を常に助けて居たので、此の峻峻な山越を宗太郎といふ様になつたといふが、又一説には逆に悪人の宗太郎といふ山賊が居て往來の人を苦しめていたとも言はれている。いづれもソウダロウといふことになる今は国道十号線が広々と開けて自動車が行く様に通つている。有難い時代になつたものである。

高地を下るにつれてこれまでの大分の川が東北に流れていたのに反し、南西に向つて流れる様になるので奇異な感じになる。峻しい山々が左右に重畳している。

折柄紅葉が美しい。道の開けていなかつた往時の難渋を偲びつゝ、景色の面白さに引かれる。山地から次第に下つて行くと、少しづつ平地が見えかけ市棚に入る。

この近くに佐伯惟治の墓がある。頭丈けを埋めたので「オトウサマ」ともいふ、又の説では塔があるから「オトウサマ」と呼んでいるとも言ふ。

此の石塔を削つて呑むと頭がよくなり、入学試験にも合格すると伝えられて来たので、此の塔は削られて細つて行つていふという。小野市は昔駅伝があつて、馬が多く飼育準備されていた所である。

次に右手に「エノ岳」といふがあり。西南戦争中西郷隆盛が此のあたりの農家に宿つて居たことがあり西郷さんの用ひた木枕と硯が残されているという。国道に添うて西郷茶屋というのが見えた、すぐ近くの右手に「西南役古戦場」の標柱が見えた。

このあたりから延岡に入る。

天正の役の起りがこの地にある。

此の地の領主伊藤義祐が薩摩の島津氏から領地を奪はれたので、救ひを豊後の大友氏に求めて来た。そこで大友宗麟は兵を日向に進め、伊藤義祐を助けんとして大戦争になつたのである。然し戦争の原因はまだ外にもあつたのである。

この奥に和田越といふ地あり。

この近くにドロ八丁といふ地名あり。泥の中で豊薩兩軍が戦つたのだといはれている。

大友宗麟は兵を三軍に分ち、自らは延岡の「ムシカ」(無麿)に一万の兵をつれて本陣に居り、田原紹忍は二万、辺井等が一万を率いて先陣していた。

延岡は江戸時代内藤七万石の領地であり、旭化成レーヨン工場あり。午前十時四十六分延岡駅前通過。延岡橋の右手が城跡である。延岡領は豊後にも多く、大分郡・速見郡等各地にあつた。庄内町の龍原・蓑草等もそうであつた。

宗麟が重く用ひた田原紹忍は宗麟夫人の兄で、紹忍は杵築奈多八幡神官の長男に生れたが、国東の田原家に行つて田原を称し、キリシタン嫌いであつた。耳川の戦いでは島津勢が負けて退却して居るのを、進んで居ると見誤つて大敗したとも或書には書いてあるという。宣教師の報告書によると、宗麟は出陣の前、紹忍の妹を離婚してその侍女を娶り、ともに洗礼をうけてから出陣したという。又従つて行つた宣教師は、宗麟が日向にキリスト教王国を建るといふ計画をしつていたので、これに大きな望みを抱いて出陣に加はつた。宗麟軍は神社等に戦勝を祀るところが若い連中は神社を破壊していたとも記されている。

豊薩の戦いについて最も確実と思はれるものは、古い家の古文書や島津家の古文書である。島津国史という木版本あり。高城を挟んで最も大激戦であつたと書かれてある。

十一時十五分

日向市役所の前に日田代官所の支所があつたという跡あり。

参謀本部編の日本戦史に、薩摩豊後の戦いの記あり。日向戦史の記事が正確な様である。

十一時二十分トイレ休憩

右奥の方から耳川が流れて来ている。この川のほとりも激戦があつて多くの戦死者を出し、大友軍が散々に負けている。この辺は日向の白石とて、碁石の工場があり、日本でも上等の碁石とされている。又海辺は日向蛤として、大きいことで有名である。美々津大橋もある。この附近が神武天皇舟出の地といはれ、四十五歳から七年かゝつて大和に入ったという。

このあたりにオスズの山というあり。若山牧水出生の地である。

宮崎県の三角平野に入る。

海辺の家は孟宗竹の藪に包まれて居り又杉桓の家もある。

茶畑が広く長々と続く。苗木育成の畑も広い。右に川南古墳群あり前方後円のもの為主で、一、二〇〇の古墳ありという。

高鍋市に入る前、川南町で宮崎県児湯郡上口村（今の高鍋市内）生水の元鹿兒島七高の先生だつた八十四歳の安田尚義先生が、今日の主催者側から連絡依頼してあつたので、バスに乗車説明して下さる。

高鍋の戦ひは天正六年十一月十一日、本年（四十二年）から三百八十年前のことで、高城には五百人の薩軍が居た。大友軍は本陣が延岡に居て先陣が高城まで来ていた。

高鍋市は、肥前秋月から移つた秋月氏の居城で三万石の小大名であつた。現在高鍋は人口二万人位。

バスは方向をかえて、北に向い高城へと向ふ。左に高鍋城があり楠林がある。

高鍋とは徳川時代に改めた地方で、古くは財部タカベといつていたという。財部といつていた時代は分限者であつて榮えていたが、高鍋という様になつてからは、鍋のカラを高く吊り上げたので、貧乏になつたと冗談言はれる様に、あまり繁昌しなくなつたと。

高城は高鍋の北東部。

大友軍は城を取ろうとして失敗したのである。

勝阪（島津軍が勝つて下つたので斯く言ふ様になつた）に登り高城の芝生の台地に着く。広さは五六十ヘクタール位か、堂あり塔碑あり下の平地を距て、周囲に小高い山がある。少しの木立もあるが、大体

四方がよく見える。ここで時間も一時過ぎる頃になつたので、皆急ぎ自由の輪を作つて芝生に座し、中食をとる。風もなく日が照るので心地よかつた。

立川先生 朝大分で駅弁六人分とか用意していたのを、誰かに頼んだといふがその人がはつきりせず、結局大分バスの待合所で弁当は眠つてゐるらしく、誰も持つて来た者がなく、高鍋の町で早く気がついたので、何か俄か弁当を見つけた様だつた。

中食後説明を聞く。

カメラのシャッターを切る者、歩き廻る者等で少時間を自由にした此の方に空堀があつたという。忠魂碑あり八角の記念供養塔がある。

私は此の地が祖先の何人か、戦死した地であると思へば痛恨の涙が出る思いである。手近い所の土二握り計りとして、ビニール袋に入れる。黒い土である。

子孫の私が恨みをのんで奮斗戦死した報告をして、碑下に氏の土を埋めようと思つてである。

大友軍の據つていた宗麟原は、東の方指顧の眼前にある。

勝阪を下りバスに乗り宗麟原の後ろ台地に登り広々とした甘藷畑の中の広い道を行きバスを置いて徒歩、木立を縫ふて宗麟原に着く。こはカンカン原ともいふ相だ。大友軍が鐘をカンカン打ち鳴らしてい

たので、カンカン原といふ様になつたといふ。高さ二メートル程の両軍の戦死者を弔ふ塔碑がある。

私は朝から立川先生から言はれてもいたし、ローソクを灯し線香を立て、塔碑の前で御経を上げた。

横から鎧を差出したので叩いて御経を上げたが、あとで分つたが鎧を出してくれたのは石城川内成 平野秀雄さんであつた。

僧でもない平野さんが、よくも鎧を用意していたものだと思ひました。平野さんの祖先が此の地で戦死しているのを知つていて、用意していたものだろう。世の中には変り者というか、感心な人が居るものだと思つた。御経を誦している間や前後に全員が線香をあげ焼香して礼拝した。

碑には次の様に刻せられてある。碑は地盤、塔身、笠の三つから成つており、塔身の部に刻銘がある。

(右横)に「干時天正十三年 大施主

(中央) 奉訓誦大乘妙典

二月彼岸日 源有信山田信介

(左横) 本来無東西何處有南北

(裏) 諸行無常是生滅法寂滅為樂

迷故三界城、悟故十方空

天正十三年とあるは戦の年月ではなく戦争後七年程して源有信山田信介という高城の城将が両軍戦死者の冥福を祈つて建立した年を刻してある。

塔の周囲は清掃されており前方にも一寸した広地があるが其の外は雑樹が立ち込んでいる。

この台地が大友軍が據つていて敗れた地である。

大友軍は此の地に居り、島津軍は高城に據り始めは僅か五百位であつたので一気に攻めれば島津軍を破ることが出来る。諸将は主張したが、田原紹忍が急がずともよい、食糧攻めにすれば戦はずして勝つと強情に言ひ張り、諸将も仕方なく高城をとり巻いて居る中に、島津の大軍が来て大友軍は殆んど戦死して大敗し、田原紹忍は真先に逃げ帰つたということである。

憶病者の小才の田原紹忍の為に多くの将士は討死し大敗したことは後世までの憾みである。

帰途

高鍋、高城を後に帰途につく。すでに午後三時である。来し方を考えると、是れから大分までは可なりの道程である。

美々津の浜で此の辺の話聞きたいと川南の役場に頼んであつたら、

六十五歳の司宗之さんといふ方がすぐ近くで用事していたのを、そのまま頼んで話してもらつた。

美々津

神武天皇東征の時、舟出の港である。

タテ岩神社あり。

この社内に神武天皇舟出の折腰掛の岩あり。日の出の美しさを感じて美々津と名づけたといはれる。

この地の名物に「ツキ入レ餅」といふのがある。これは神武天皇を迎へて何かと歓迎申上げたいと餅をつくことにしたが、その時は餡を丸めて中に包みこむのも、もどかしく臼の中に餡を一しよに搗き入れて餅を作つたのが始まりといふ。

又神武天皇舟出の時、早く起きよ く と起したといふ。

此の附近に天が日ぐりといふ地名あり。(この意味はよく聞き洩した)

斯くて日暮宇日町ドライブインでトイレ休憩して、のどをうるはず等した。私はここの民芸みやげの石人形二つを買つた。珍らしい他あまり見ぬ小石で作つたみやげ品である。

発車すでに夜になっていた。是れからは外界は見えず、自己紹介や唄が続いて楽しく臼杵、津久見次いで戸次方面と会員の下車あり、午

後八時二十分大分駅前に着き解散。私は親族の家に泊る。帰宅は翌日である。

結 び

私は祖先田北氏の戦い又戦死した地を訪ねて弔いたい念願が叶つたのであるが、本日の会員の人々の中にも同じく天正の役で戦い又戦死した人々の子孫も可なりあつたであろうが、誠に結構な計画であつたことを主催者に感謝し、詳細に各地について説明していただいて、大いに有意義に旅を全く事故もなく続けたことを感謝する次第です。

宗麟原の碑の前で額づいた感激は忘れることが出来ず、戦死の霊に通じたことと信じます。

尚私は車中の手記で説明を聞いてまゝ書いた積りではあるが、誤りがあるかもしれませんが、説明者の責任ではなく、私の聞き違い書誤りであるので、後日誤りや洩れについて御教示願いたいののであります。

今一度この行を辿つて見たいのです。主催者の時機を得て再度この計畫を樹てて下さることを併せて願ふ次第です。

昭和四十三年二月十二日 記

(直入郡直入町)